SS 2009　「形式手法ワーキンググループ」ポジションペーパー

株式会社 電盛社　ネットワークシステム部　小谷満也（m_kotani@densei.co.jp）

弊社開発現場では、以下の 3 種類の開発を行っています。

1. 1000 万行に及ぶ組込ソフトウェアの改造開発
2. 客先からの受託による個別ソフトウェア開発（新規・改造）
3. 業務システムパッケージの開発・導入

このところの経済状況から、特にコスト削減（価格競争）が厳しくなってきています。
このような状況で、弊社では、

- 仕様把握から開発まで出来るエンジニアに対する負荷の集中
- ノウハウを持つエンジニアによって、仕様のあいまいさを経験などで解決しながら作業短縮を行う

といった、人の能力に頼る、検証不可能な形での開発がどうしても増えてしまっています。
このような開発はいつまでも続けられるものではないため、仕様把握が得意なエンジニアによって形式手法で仕様作成し、それを後工程のエンジニアに渡すことで、エンジニアの能力だけに依存しない形での開発が出来ないかと思っております。

形式手法ワーキンググループでは、

- 形式手法の QCD メリット・デメリット
- 現場エンジニアへの導入障壁は何か
- 改造開発への導入ステップと再改造への再利用・保守

といった、一般的なエンジニアに対して形式手法の導入が可能なのか、そこで問題になるのは何か、問題を取り除いて導入するにはどのようにやっていくのが良いかといったことについて議論したいと思っています。